

・展覧会タイトル「一日」について

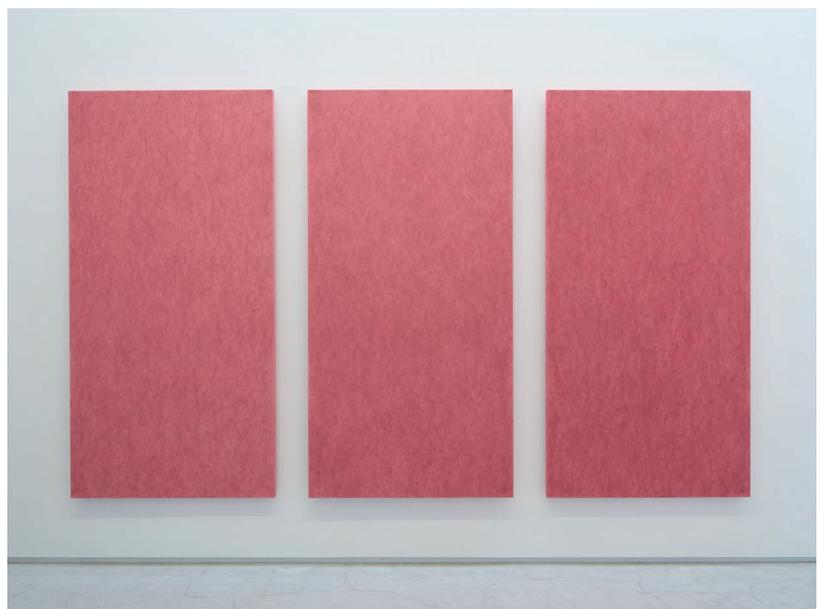
私は、展覧会をつくるにあたって「絵を見てもらおう事」よりも、「絵のある空間を体感してもらおう事」を昔から強く意識しています。gallery Nの会場に訪れた時、ギャラリーのオーナーである二宮夫妻の住居である事が特に印象に残りました。この場所には作品を集中して観るというホワイトキューブの機能に加えて、人が朝起きて夜寝るまでの日々の生活をする住居としての機能があります。更に1階のギャラリーは、作品を照らすためのスポットライトがなく、大きな窓から射す自然光が空間を照らす為、朝日が昇って燦々と昼光が降り注ぎ、その後夕日に作品が照らされて沈むまでの一日の流れがよく分かります。

私の作品は、口紅やファンデーション、アイシャドウ、日焼け止めを幾層にも重ねながら描いています。私にとって自分の身体と心に一番身近である化粧品という素材で、日々の移ろいゆく自分を自画像として絵に描き写しています。その日の私が生きた記録という意味で、作品タイトルには絵が完成した日付を必ず入れています。化粧品という生ものを画材として扱い、その日その瞬間を自画像として自らの絵画に落とし込んでいる私の作品は、人の生活の息吹や、日が昇ってから沈むまでの時間の移ろいがよく分かるこの空間と、「一日」というキーワードで共振できるような気がしました。

私の作品名には、「今日」という言葉が作品のタイトルに入っている作品がいままでも幾つかあります。作品タイトルには絵が完成した日付の前に、言葉や単語をいれる事もあります。例えば、《そして今日もまた眠るだけ 2015.10.12, 2015.10.14, 2015.10.17》、《積層する今日 2023.11.09》など。私にとって、「朝に目を覚まして夜にまぶたを閉じて眠りにつく」という一日の時間の流れと、「生きる事とやがて迎える死」という人生の一連の流れは似ていると感じている為です。生きる事について考える事は、その先にある死について考える事と切り離しては考えられないので、いまという瞬間を生きる事を強調しつつ、やがてくる死もどこか暗示させるような言葉として、「今日」という単語をよく使用します。(作品を見る人や受け取る人に作品を見て自由に楽しんで欲しいので、作品名には「生きる・死ぬ」などの直接的な言い回しを避けるようにしています。)



《積層する今日 2023.11.09》
162cm×124cm×10cm
化粧品、紙、パネル
2023年制作 Photo by Tadashi Okochi



《そして今日もまた眠るだけ 2015.10.12, 2015.10.14, 2015.10.17》
各 240cm×120cm×3cm
化粧品、紙、パネル
2015年制作 Photo by Tadashi Okochi

余談ですが、私は現在植木屋さんで事務職員として働いているのですが、実生木という存在を職場で初めて知りました。鳥が植物の果実を食べて、その鳥のフンに食べた果実の実が混ざって、その実が地面に根を張り芽を出して成長する樹木を実生木と呼ぶそうです。私は、実生木の存在を身近で知り、生命が循環している事に対して初めて実感が湧きました。

「一日を人生に準える」と今回の展覧会のステイトメントに書きましたが、朝起きて夜眠る事までの一日の流れも、生きる事やがて死ぬという人生の流れも、「目覚める/生きる→眠る/死ぬ」と一本の直線で結ばれているのではなく、ぐるぐると輪廻のように巡り続けているのかなとも最近考えるようになりました。死は終わりを意味し、その先には何も無いと思っていたのですが、ぐるぐる永続的に循環していくのものなのかもしれないと思い、今回の展覧会のメインビジュアルに使用した作品にも、《永遠 2025.07.31》と命名しました。

・会場構成と作品について

前述の通り、絵が飾ってあるこのギャラリーNの空間を、ひとつの「作品」に出来るように意識して会場構成をしました。住居の機能を持つこのギャラリーで、二宮夫妻の生活空間としても私の作品を溶け込ませたかったので、絵を見るというより空間を体験する事を重視して、作品のサイズ感などを考えました。私の最近の絵は、厚みがあり側面にも色を塗り込んでいるので、どこか立体物の様にも見えます。その為、作品の持つ物質感と空間との調和をととても大切にしています。

私の作品は、見る角度によって色彩や質感が変わります。例えば、《2025.07.06》(H116.7×W91×D8.2cm)は、カッターで表面に凹凸をつけることによって、一見ピンク色だけに見える画面が様々な角度から見たときに表情の変化が分かる作品です。自然光だと幾層にも重ねた色彩の繊細な変化や化粧品特有のパール感やラメ感がより分かり、一日の陽の当たり方で作品の見え方も大きく変わります。なので、朝日・日中の光・夕日・夜の街灯、と様々な光がたっぷり入る場所に、この作品を展示をしています。

細長い作品も同様に、一日の陽の当たり方や見る場所での表情の変化がよく分かるように敢えてこのサイズ感で制作しました。例えば、白壁の作品に展示した作品《2025.07.20》(H60×W178×D8.2cm)は、壁も作品の一部だと考えた時に、壁の面積をたくさん見せる事ができる作品の形状にしたいと思い、横に長いサイズにしました。向かいに展示した《永遠 2025.07.31》(H45.5×W38×D5.2cm)と対の作品にして、作品の線が交わることなく、永遠に並行に続くようなイメージで空間をつくっています。

和室は、鉄壁にも絵を掛ける事ができるのですが、敢えてイーゼルを使用しました。和室の空間があまり広くないので、お客さんは少人数で作品と向き合う鑑賞方法になります。絵という私の分身と一対一でお客さんが対面するイメージが浮かんだので、和室で展示する作品は1点のみとしました。そして、絵に物質として「存在している」という事を強調させたかったので、物質の存在感を証明する「影」が見える事と、お客さんにより近距離で作品のディティールを見もらう事を考え、イーゼルでの展示方法に決めました。

・最後に

私が展覧会を組み立てるにあたっての経緯などをお話しましたが、この展覧会「一日」の作品群は、2025年5月から9月上旬の期間にかけて描いた作品になります。その頃の私と現在(2025年9月18日)の私とでは、考えている事も制作における興味もまた変わっています。こうやって数ヶ月前に私自身が描いた作品についてお話する時、まるで「別の人が描いた絵」について話しているような不思議な感覚に陥ります。その度に、過去の自分はもうここには居ない事を改めて感じ、人は時間と共に刻々と変化していくのだなと感じます。だからこそ、私は絵をこれからも描き続けて、いまこの瞬間を絵に描き留めておきたいし、今後の作風と自分自身の変化も楽しんでいきたいなと思っています。

(2025年9月18日 今 実佐子)